



初めての体験

Chapter 1

高まる田舎への需要

大量生産・大量消費の高速型ライフスタイルは、もはや時代遅れ。効率優先、画一化された社会は、人間関係の希薄化や自然と触れ合う機会の減少を引き起こした。

近年、そういった社会に疑問を抱く人々が、地球環境にやさしいエコな暮らしやグリーンツーリズムなどに代表される「心の癒やし」を求めるライフスタイルを選び始めた。都市と農山漁村に住む人々が、お互いの地域の魅力を理解し合い、交流する取り組みが活発化してきたのは、自然な流れだと言える。そのような時代の中、農業体験などを通して、子どもたちの心の豊かさや生きる力をはぐくむ、教育旅行の需要が高まりを見せている。

猪苗代の農業を体験

都会の子どもたちが、農山漁村で長期宿泊し、その土地の自然や地域に住む人の暮らしに触れ、地域住民との交流を通して、自然や人との触れ合いの大切さを学ぶ農村生活体験。

本町でも、昨年から本格的に農業体験の受け入れが始まった。昨年は3校253人が、本

年度は、4校593人がこの町を訪れて農業体験を通じた交流をしている。

松戸市立第六中学校の農業体験は6月10日に実施され、2年生の292人がクラスごとに、ひし巻き作り、苗の植え直し、ニラの出荷作業やトマトの苗植えなどを体験した。

生徒たちの指導に当たった農家では、「まず、猪苗代の自然に触れて、その素晴らしいさに実感してほしい。そして、毎日自分たちが食べている農作物が、どのように作られているのか、農業の大変さ、大切さをしっかりと学んでほしい」と話した。

生徒たちは、初めての体験に戸惑いながらも、笑顔で作業に取り組んだ。ひし巻き作りでは、笹の間からこぼれ落ちるもち米に悪戦苦闘した。田んぼに入り、苗を植えながら、泥の感触を楽しんだ。初めて握ったおにぎりは、少しかっこ悪かった。

そして、自分たちのために、一生懸命に農作業を教え、気遣ってくれる、地域の人のやさしさと温かさに触れた。

「すべてが初めての経験です。難しいし、疲れたけど、楽しいです。田舎の人は、本当にあったかいですね」生徒の一人は、そう言って笑った。

特集 種を蒔こう

グリーンツーリズムなどに代表される、都市と農山漁村に住む人々が、お互いの地域の魅力を理解し合い、交流する取り組みが活発化している。その中でも、近年特に注目されているのが教育旅行だ。需要の高まりを見せる教育旅行を通して、都会の人たちが、この町を訪れるためには、何が必要かを考える。



1_長坂地区の田んぼで、苗の植え直し。楽しそうな笑顔が弾ける 2_初めて乗った軽トラックの荷台。作業の合間に、みんなでちょっと一休み 3_中ノ目地区でひし巻き作りに挑戦中。ひもの縛り方や穴の閉じ方に悪戦苦闘 4_相名目地区ではニラの出荷作業を体験。生徒たちが頑張って束ねたニラは、店頭で並ぶ 5_曲淵地区のビニールハウス内でトマトの苗植え。苗を植えた後は、ていねいに土で覆う 6_五十軒地区の宇川クリーンファームで、おにぎり作り体験。ゴマをどうしていいかわからず、おにぎりの中に入れてしまった生徒も 7_地域の人と協力して、ニラの袋詰め作業



これからの課題

Chapter 2

猪苗代の林業を体験

つくば市立谷田部中学校の農業体験は7月15日に実施され、2年生の163人が、クラスごとに、花の管理、野菜の収穫、水生生物の採集や枝うちなどを体験した。

林業体験を実施した長坂地区では、NPO法人「会津の森林を育む協議会」の鈴木良一さんと長坂地区の住民らが、枝打ちや下草刈りなどの指導に当たった。作業前のレクチャーでは、森林が果たす役割やなぜ枝打ちが必要なのかを話し、生徒たちに林業の重要性を説いた。枝打ち体験では、ヘルメットをかぶり、手にのこぎりを持った生徒たちが、余分な枝を落とす、倒木を細かく切るなどの作業に取り組んだ。



枝打ちに挑戦する谷田部中学校の生徒



谷田部中学校の生徒たちから届いたお礼の手紙

教育旅行終了後、生徒たちからお礼の手紙が届いた。

「農業、林業の大変さ、大切さが分かった」「収穫したてのキュウリは、今まで食べた中で一番おいしかった」「いい思い出になった」などのほかに、お世話になった人の体を気遣う言葉が多かった。体験を通じた地域の人との心の交流が垣間見えた。

猪苗代をまるごと体験

ことで3度目となった調布市立富士見台小学校の「山と湖の磐梯キャンプ」は7月25日から31日まで、民泊を含む6泊7日で開催された。

民泊体験では、5年生の児童ら34人が、3班に分かれて長坂地区の民家に宿泊。ホテル見学

や農業体験などを通して、受け入れ農家との交流を深めた。また、野口英世記念館の見学、磐梯山登山、猪苗代湖のカヌーや民話語りなど、この町にある魅力を存分に体験した。

民泊も含めた、長期滞在型のリピーターである同校の教育旅行は、本町が目指す教育旅行のモデルケースの一つだ。



長坂地区の鈴木忠一さん宅で民泊を体験する富士見台小学校の児童ら



収穫したジャガイモを水洗いする

本格的な受け入れが始まってから、まだ2年目の本町の教育旅行。この地を訪れた学校をリピーターにすると同時に、新しい学校を呼び込むためには、一体どんなことが必要か。受け入れ団体が今後の課題を話し合った。



あいさつをする鈴木宣夫観光協会会長

農業体験の情報を、交換・共有することで、体験内容の充実を図るための反省会は7月9日、

いくな郷の蔵2階の多目的ホールで開かれた。会議では、教育旅行の受け入れ団体が一堂に会し、これまでの農業体験実習の問題点や改善点を話し合った。意見の一部を紹介する。

農業体験について

・学校と協力して、もっと早いスケジュール管理ができない



中ノ目愛菜クラブ、吉野肇さん

か。教育旅行に合わせて畑を空けたり、作ったりする場合もあるので、学校や旅行代理店を含めた体制づくりが必要だ。

- ・事故、ケガなどが起きた場合の緊急連絡体制がはつきりしていない。保険だけではなく、そういったものこそ早急に整備すべきだ。
- ・農業体験をして終わりにするのではなく、その後の育成状況の発信や学校を訪問して販売するなど、交流を継続する企画づくりをしてはどうか。
- ・子どもたちは、休憩時間や自由時間も楽しそうに遊んでいる。作業に縛られることなく、自由時間を増やしてあげればいいのか。

子どもたちについて



磐梯スポーツ村、宇南山隆さん

- ・一生懸命にやる子もふざけている子もいる。先生の指導が欲しい場面もあった。
- ・事前に子どもたちの情報を教えてほしい。例えば、疲れやすい子なら、他の作業をやつてもらうなど、情報をもとに細かい対応ができる。学校、旅行代理店との打ち合わせが必要だ。

宿泊について

- ・民泊の受け入れ農家がまだ少ない。町が補助を出すなどして受け入れ農家を増やすことを考えられないか。

食事について

- ・6月ごろまでの地物の野菜ができていない時期、猪苗代の家庭の味である山菜や保存食が、子どもたちに受け入れられるか。
- ・自分たちでおにぎりを握る体験は、好評だった。



相名目地区、瀬戸亮さん

短時間の反省会ではあったが、受け入れ農家では、多くの成果や反省点を見つけていた。この町の農林業体験の受け入れは、まだまだ始まったばかり。システマ的な課題は、学校、旅行代理店や町などと話し合い、徐々に改善していけばいい。

重要なのは、猪苗代でなければ体験できない、「猪苗代オリジナルの教育旅行」を提供することではないか。

おもてなしの心で、生徒たちを迎える。飾らない、ありのままの生活や農業体験を通して、生徒たちと心のかよった交流をする。それはすでに、この町オリジナルの教育旅行。

この町での体験やあたたかい交流が、生徒たちの心に刻まれ、大人になった彼らが、猪苗代を「第二の古里」として訪れる。そんな教育旅行にするためには、受け入れる農家だけではなく、地域や町民全体での取り組みが必要だ。

Chapter 3 猪苗代ツーリズム

都市と農山漁村が交流することの魅力は、教育旅行に限ったことではない。教育旅行の猪苗代オリジナルの考え方は、本町の基幹産業である観光にも共通している。交流がこの町にもたらすものは何なのか。

交流人口を増やす

交流人口とは、観光や教育旅行など、さまざまな理由でこの町を訪れる（交流する）人のことを指す。この町に住んでいるわたしたち、定住者の人口に対する概念である。

少子高齢化が一段と進む中で、定住人口の増加を追い求めることは困難となりつつある。このため、定住人口ではなく、交流人口を増やすことによって、地域の活力を高めていこうという意識が、日本中で一般化しつつある。

定住人口が減り続けている本町も例外ではない。町の基幹産業である観光や商業面から考えてみると、わたしたちが1日に使う金額と比べ、代表的な交流人口である観光客が1日に使う金額のほうが、はるかに高い。つまり、交流人口をいかに多く獲得できるかに、本町の浮沈がかかっているとも言える。

グリーンツーリズムなどの時代のニーズに合わせた、いろいろ

ろな面での猪苗代オリジナルの確立が、今、求められている。



猪苗代ツーリズム

猪苗代オリジナルの農林業体験プランとは、一体どんなものだろうか。本町の教育旅行に対する取り組みで触れた、農林業体験は、一般の観光客についても応用できる。そこに、磐梯山、猪苗代湖、野口英世記念館、そ

農業、林業だからといって、作業にこだわる必要はない自由度の高い「農家体験」を



宇川クリーンファーム
代表 宇川 進さん

「先日、6月に教育旅行でここを訪れた松戸市立第六中学校の生徒が、遊びに来てくれました。本当に楽しかったと言って、家族を連れて来てくれたんです。うれしかったですね」そう語るのは、宇川クリーンファームを営む宇川進さん（五十軒）だ。

教育旅行の休憩時間に、近所の農家をお願いして、牛の餌になる草をロールにする作業を見せてもらった。すると子どもたちは目を輝かせて作業を見つめていたという。

「田んぼの間を流れる用水路や作業をするトラクターなど、わたしたちが本場に当たり前だと思っていることが、都会の人にとっては非日常。特別な体験なんです」と語る。

「農林業体験だからといって、田畑や山で作業をするにとだけにこだわる必要はありません。ありのままの農家の生活を見せるだけでも、都会の人たちは感動するんです。猪苗代には、魅力のある場所がたくさんあります。それを見い出して有効に利用したほうがいい。【農業体験】ではなく、もっと自由度の高い【農家体験】にすることで、この町の魅力を、さらに伝えられます」と話す。

「町が購入した冷害試験地の跡地に、体験農場としての基盤を作ってほしいです。そして、農業体験などを全町的にバックアップしてほしいです」宇川さんは、そう言っ

農林業体験の参加者を増やすことは、猪苗代のファンを増やすことにつながる



いなわしろ体験学習推進協議会
事務局 (社)猪苗代観光協会
天野 信雄 事務局長

猪苗代オリジナルの教育旅行プランや農林業体験プランとは、この町の地域事情に合わせたプランと言い換えることができます。例えば、町内の民宿などでは、7、8月は学生合宿の受け入れを中心に営業をしてきました。そういうリピーターは、これからも大事にしていきたい。農林業体験の生徒たちは、合宿の団体と同宿というのを好まない傾向にあります。

ない時期には、ホテル、旅館や民宿などに宿泊しても、農林業を体験し、しっかりと交流の時間が作れるプランを作ることも忘れてはいけません。農林業体験の参加者が増えることは、猪苗代のファンが増えることにつながります。買い物などで、猪苗代の名が入った商品に、親近感を覚えて購入したり、家族や友人と一緒に猪苗代を訪れるリピーターになったりすることが期待されます。そのためには、教育旅行などでこの町を訪れる生徒たちや観光客と、心から交流をすることが大事です。町民一人一人が、おもてなしの心を持って、外から来たお客さんと接してほしいと思います。

団体や家族連れの猪苗代ツーリズムを、個人として受け入れられる体制を持つ農家は、まだそんなに多くはない。しかし、民泊でなくても、人と人との交流を持つことはできる。町内にたくさんあるホテル、旅館や民宿なら受け入れは可能だ。農業をしていない民宿でも、ホテルや旅館と同じように、農家などに協力を依頼して、農業体験を実施することができ

ニーズに合わせる

1週間程度の長期滞在ができるのなら、余裕を持って猪苗代ツーリズムを楽しむことができる。しかし、ヨーロッパ諸国などと違い、グリーンツーリズムなどの概念に乏しい日本では、長期滞在自体が難しい。では、多くの一般的な観光客が、猪苗代ツーリズムをあきらめなければいけないのだろうか。それならば、1泊2日でも、この町の魅力を堪能できるプランを作ればいい。

幸いにも、この町は人材の宝庫だ。知識や技能・技術を持ったシルバークリエイター世代がたくさんいる。民宿や旅館に泊まり、農林業体験やそば打ち体験をし、夜は民話語りに耳を傾ける。次の日には、磐梯山、猪苗代湖や野口英

世記念館を訪れて、家に帰る。そんなプランを作ることができる。また、冬になればスキー場という魅力が追加される。この町には、さまざまなニーズにえられる条件が揃っているのだ。

地域が活性化

猪苗代ツーリズムの実施によって、新たな雇用の創出も見込まれる。民宿が忙しくなれば、手伝いが欲しくなる。そば打ちや民話語りは、趣味ではなく、ちょっとしたサイドビジネスになる。そういった、新たな雇用やシルバークリエイターの有効利用などが、町の外からお金を呼び込み、地域経済を活性化させることになる。

都会の人たちが、この町を訪れることやシルバークリエイターに活躍することは、地域や地域に住むわたしたちを活性化することにもつながるのだ。



今年のいなわしろ民話祭りの様子

Chapter 4 種を蒔こう^ま

全国には1,700を超える自治体がある。
この町に来てくれた学校や観光客は、
その中で猪苗代を選んでくれた人たちだ。
わたしたちは、1,700分の1に選ばれた
誇りと自信を持ってこの町をPRしていこう。
おもてなしの心を胸に抱いて

子どもたちの心の中に

わたしたちの心の中に

先人から受け継いだ、この地域に誇りを持ち、自信を持って発信していく

曲淵大根クラブ会^{あき}
会長 佐藤 智昭さん
(中央左)



左から鈴木吉彦^{よしひこ}さん、佐藤会長、佐藤孝子^{こうこ}さん、渡部喜則^{よしのり}さん

「農業を通して、都会の子どもたちに、農業の大切さと人と人との触れ合いを教えたい」と、3年前から富士見台小学校の教育旅行受け入れを開始したのが、曲淵大根クラブ会だ。「いい先輩に恵まれて、いいメンバーで活動できている」と話すのは、佐藤智昭会長。

「教育旅行の受け入れをすることは、自分自身の教育でもある。だから、教育旅行の前に、しっかりとミーティングをして、農業体験の質を上げたい。子どもたちにとって最高の体験をしてもらい、何か一つか二つ、心に持って帰ってほしいんです」と真剣な表情で話す。

同会では、教育旅行だけで

はなく、地元の小中学生とも交流をしている。「昔は、このあたりの子どもたちに農業体験なんて必要なかった。家の手伝いをしろといえば、農作業だったから。今の子どもたちは、そういう体験をしていないから、わたしたちが体験をさせているんです。それが、担い手の育成などにつながります」会長は自信を持って答える。「先人たちやおじいさん、おばあさんの世代なごが残してくれたこの地域をつないでいくという意識で活動している。この地域に誇りを持ち、自信を持って発信していくこと。この思いを次世代に継承していきたい」佐藤会長は、引き締まった表情で、そう話した。

極上の田舎暮らし

一昔前の日本では、都会に出て「一旗挙げる」のが成功の証しとされていた。しかし、時代は変わった。

「わたしたちは田舎に住んでいるから」と引け目を感じていた人たちが、「わたしたちは、魅力にあふれる田舎に住んでいる」と胸を張る時代になった。

本町を訪れる農林業体験の生徒たちは、本年度で593人。観光客は、年間約200万人。そして、それだけの人が訪れるということは、この町の歴史、文化、自然やこの町に暮らすわたしたちの生活に、魅力があるということだ。

磐梯山や猪苗代湖に囲まれた中で、農業を営み、季節を感じながら生活する。わたしたちにとって当たり前の日常は、都会で暮らす人々にとっては、お金を払ってでも体験したい、非日常。昔から続いてきた、磐梯山猪苗代湖や野口記念館という観光に、農業体験を通して、人と人とのコミュニケーションという付加価値が加わった生活は、まさに、極上の田舎暮らしだ。

1,700分の1の誇り

全国には1,700を超える

自治体がある。この町を選んで来てくれた学生たちや観光客は、この町を1,700分の1に選んでくれた人たちだ。

1,700分の1に選ばれた誇りを持って、この町で生活していこう。1,700分の1に選ばれたという自信を持ってこの町を発信していこう。そして、1,700分の1に選んでくれたすべてのお客さんに、「感謝とおもてなしの心」をもって接し、猪苗代を選んでよかったと言ってもらえる交流をすることが重要だ。

交流人口を増やし、町を活性化させるためには、わたしたち一人一人が、この町を訪れた人と、どれだけ心を通わせる交流ができるかにかかっている。

教育旅行に訪れた生徒たちの心の中に、何か一つでも成長するきっかけとなる種を蒔こう。わたしたちの心の中に、「おもてなしの心」が育つ種を蒔こう。どの花もかわいらしい芽を出し、立派に咲くことだろう。その花の中から、猪苗代に根付く花があるのならば、こんなにうれしいことはない。

特集 種を蒔こう 終わり